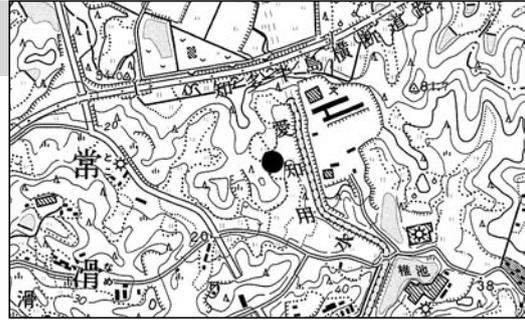


じゃばさま  
蛇廻間古窯跡

所在地 常滑市蛇廻間地内  
(北緯34度53分51秒 東経136度51分30秒)  
調査理由 常滑東特定土地区画整理事業  
調査期間 平成16年7月  
調査面積 700㎡  
担当者 宮腰健司・早野浩二



調査地点(1/2.5万「常滑」)

**調査の経過** 蛇廻間古窯跡は、常滑市蛇廻間地内に所在する中世常滑焼の古窯跡である。本窯跡の発掘調査は、常滑東特定土地区画整理事業に伴う事前調査として、都市基盤整備公団(現独立行政法人都市再生機構)より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成16年7月、調査面積は700㎡である。

**立地と環境** 蛇廻間古窯跡は、知多半島中央丘陵から西に派生する尾根に形成された小谷内の東斜面に立地する。尾根の標高は約37mである。同一尾根の北斜面には四池A・B古窯、先端付近の南西斜面には夏敷古窯跡、支谷を挟んだ東尾根上には柴山古窯跡群が立地する。

**調査の概要** 尾根には北東斜面を中心に中世陶器が散布するが、発掘調査の結果、灰原は現地表下に埋没した尾根の斜面にその末端部分が残存するのみで、窯体やそれに付随する施設はすでに滅失したことが明らかとなった。旧来の自然地形そのものも、農地の造成、土砂の採取や流出によって大きく改変され、尾根の北東斜面のみが相対として旧地形を良好に残存させているに過ぎなかった。

**灰原** 灰原は現地表下約1～2mに埋没した尾根の南東斜面において確認した。確認した灰原の層厚は約30cmと薄く、灰原の末端部分に相当するものと考えられる。灰原は地表下の尾根の斜面上にさらに広がると想定されたが、完掘は不可能であった。

**出土遺物** 遺物は尾根の斜面に堆積した流出土、灰原から出土した陶器が大部分を占める。これらは常滑窯編年2型式を主体とし、12世紀後半の年代が与えられる。焼成された器種には甕、鉢、三筋壺、碗、皿、羽釜がある。  
(早野浩二)



調査区全景



調査区土層断面